

埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

Annotation of “Kougougu Kanshi syunju utaawase”

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-02-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森田, 直美 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1372

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



皇后宮寛子春秋歌合 注釈と小考

森田直美

一、皇后宮寛子春秋歌合 小考

本稿では、平安中期の歌合、皇后宮寛子春秋歌合の注釈を呈す（ただし、仮名日記部分は割愛し、歌合部分のみ注釈を試みた）。和歌注釈の前に、本歌合の概要や出詠歌について、些か考えるところを記したい。

本歌合は、天喜四（一〇五六）年四月三十日に、藤原頼通の後見のもと、後冷泉天皇も臨御し、皇后寛子在所の一条院において催された。春秋九題（左方「春」、右方「秋」にちなんだ異題歌合）に、祝一題を加えた十番から成る。

藤原道長の執政期には、小規模な歌会や『拾遺集』の成立といった和歌の事績はあるものの、大規模な歌合は開催されなかった。この様相が変化するのは、頼通執政への移行期からである。長元五（一〇三二）年に上東門院菊合、その三年後には高陽院水閣歌合が催された。¹⁾さらに永承年間以降は多くの歌合が開催され、永承四（一〇四九）年には内裏歌合が復活する。そして七年後の天喜四年、本歌合開催の運びとなった。

皇后宮寛子の入内は永承五（一〇五〇）年のことであり、翌年からは、中宮章子との二后並立状態が続いていた。寛子、章子ともに皇子をもうけていない状況の中、その閉塞的な空気を文化的盛儀によって切り替えようと試みる頼通の意図が推察される。

本歌合には寛子の女房をはじめ、祐子内親王の女房、内裏女房、上東門院の女房まで参加し、公卿・殿上人のほとんどが列席している。判者は内大臣・藤原頼宗が務めた。萩谷朴氏は「人的構成から見ても、永承四年内裏歌合以上の効果をもたらした」と評している。

歌合を彩る空間演出にも特筆すべき点がある。本稿では触れないが、特に左方春・右方秋を基調とした女房装束は、従来の歌合装束とは一線を画す新しい趣向が見てとれる。出詠歌のみならず、あるいは和歌以上に注目されるのは、贅美を尽くした調度品や装束である。ここに「演出腐心の時代」とも言うべき、平安中期歌合の一傾向を見ておきたい。²⁾

さて、本歌合には全二十首の和歌が出詠されている。うち十二首が『後拾遺集』以下の勅撰集に採られ、和歌史においても注目

を集めたことがうかがえる。歌題にも特徴があり、萩谷氏は「臨時客」の出題は歌合史上唯一の例であり、「春雪」「駒迎」も他例が乏しく、人事題に「祝」があり「恋」がないことも前例がないと指摘している。

また、出詠和歌の表現面で特に目を止めたいのは、全二十首のほとんどに古歌の影響が顕著という点である。平安中期の歌人たちにとって、古歌を意識することは詠作の基本だが、それを考慮してもなお、非常に強い古歌への意識が感じられる。そして、以後の勅撰集に採択されるか否かは、古歌の表現を摂取した上での、発展性の有無にあるのではないかと察せられる。

たとえば、勅撰集に入集しなかった例として、九番右「いづれをかわきて引かまし春の野になべて千年の松の緑を」（源顕房）がある。当歌は、「いづれをかわきて折らまし梅の花枝もたわにふれる白雪」（躬恒・三七二）といった先行歌を応用したものと考えられる。子日の小松引きを晴れやかに詠んだ手堅い詠だが、古歌からの表現的発展性は乏しい。

反対に、『後拾遺集』に入集した七番右「秋の夜は山田の庵に稲妻の光のみこそりあかしけれ」（伊勢大輔）などからは、古歌を摂取した上での工夫が感じられる。「秋の田」に「もる（守る・漏るの掛詞）」を詠み合わせる先行歌は多いが、その多くは、「ほにもいでぬ山田をもると藤衣いなばの露に濡れぬ日ぞなき」（古今・秋下・三〇七よみ人しらず）など、「露が漏る」とする。これに対して伊勢大輔は「稲妻の光が漏れ入る」とした点に新味が感じられる。そして本歌合以降、「山田を守る」と「稲妻の光が漏る」の掛詞を踏襲する歌が確認でき（詳しくは注釈に述べる）、

その表現の浸透が看取できるのである。

この例をはじめ、後代和歌への影響という点から考えると、本歌合における伊勢大輔の功績の大きさがうかがえる。詳しくは注釈に譲るが、伊勢大輔が四首の出詠歌において試みた新しい詠みぶりは、いずれも後代和歌に踏襲され、一定の浸透を見ることができ。伊勢大輔の歌は、負け三首、持一首と、勝敗は決して芳しくない。しかし、当時の歌合において、一番合は左勝が暗黙の了解となっており、十番合の左は御製歌で、これも純粋な和歌の優劣による負けとはいえないのである。

『四条宮下野集』によれば、本来出詠予定であった下野の三首のうち二首は、上東門院彰子の鶴の一声によって伊勢大輔歌に差し替えられたという[※]。下野の悔しさは家集から読み取れるが、差し替えられたと思しき二首を読むと、やはり伊勢大輔歌に一日の長があると感じられる。歌合の勝敗は不本意なものであったが、老練歌人・伊勢大輔の面目は、後代歌への影響力によって保たれたと言えよう。

二、皇后宮寛子春秋歌合 注釈

【凡例】

- ① 本注釈は、陽明叢書国書篇第四輯『平安歌合集上』（思文閣一九七五年）所収の影印（廿卷本第二種甲類）を底本とする。
- ② 本注釈では、仮名日記部分は割愛し、歌合部分のみの注釈を呈す。
- ③ 歌合本文は、読解の便宜上、適宜仮名漢字を改め、詞書と判詞には句読点を施した。表記を改めた箇所は、右にルビで底

本の表記を示している。

- ④ 底本のままでは解釈が著しく困難と判断した際は、底本傍記等を用いて校訂する。この場合「語釈」もしくは「補説」に、校訂理由を明記する。

- ⑤ 本注釈に複数回触れる先行注釈は、以下の略称を用いる。

・ 久保木哲夫校注『伊勢大輔注釈』（貴重本刊行会、一九九二年）↓『伊勢大輔注釈』

・ 久保木哲夫氏他著『範永集新注』（青簡社、二〇一六年）↓『範永集新注』

・ 田島智子校注「皇后宮春秋歌合」（和歌文学大系『王朝歌合集』所収、明治書院、二〇一八年）↓『王朝歌合集』。

【注釈】

【一番】

一番 左勝 臨時客

小式部命婦

春立てばまづひきつれてもろ人もよろづ世経べき宿にこそ来れ

右 月

伊勢大輔

曇りなき空の鏡と見ゆるかな秋の夜長く照らす月影

空に鏡の定まりてあるかとて

【左歌他出】 童蒙・八七九、袋草紙・三九四、栄花・五三六

【右歌他出】 続後撰・秋中・三二七、伊勢大輔・三〇、童蒙・

八八〇、袋草紙・三九五、栄花物語・五三七、秋風・秋上・

三四〇

【左歌語釈】 ○臨時客 正月の始めに、摂政・関白・大臣の家で大臣以下公卿を招いて供応すること。○春立てば 立春。○まづ

ひきつれて 正月にまず連れだつての意。「松引き」を響かせ、子の日の行事である小松引きを想起させる。「春立てば子の日の松をひきつれていづら祈りし千代のしるしは」（海人手古良・六七）。○もろ人も 春が来るだけではなく多くの人々も、の意。○よろづ世経べき宿 客を供応する貴人に対し、「万世も続く」と言祝ぐ表現。ここでは皇后宮寛子や、歌合の実質的主催者である頼通が意識されているよう。

【右歌語釈】 ○空の鏡 照る月を鏡に見立てた。すでに『万葉集』に「真澄鏡 照るべき月を 白妙の 雲が隠せる あまつ霧かも」（巻七・雑歌）など見え、平安時代においては常套的な表現。「雲居なる月とは見えて塵もぬ鏡にむかふ心ちこそすれ」（和泉式部・一三三）。「寒流帯月澄如鏡」（和漢朗詠集・三五九 白居易）といった漢籍に影響を受けた発想と考えられる。○空に鏡の定まりであるか 「空に鏡が留まっていることがあろうか」とする判詞。「空の鏡」という比喻を難として左を勝ちとする。

【通釈】 一番 左勝 臨時客 小式部命婦 立春にはまず連れだつて、（春だけではなく）多くの人々も、万世続くであろう宿に来ることだ。

右 月 伊勢大輔 曇りのない、空に浮かぶ鏡のように見えることだ。秋の夜を長く照らす月は

「空に鏡が留まっていようか」といって、（左の勝ちとなつた）。

【左歌補説】 「臨時客」の題で詠まれた和歌は多くはないが、時代的に近い『後

拾遺集」（春上・一四・一六）に三首確認できる。また、子の日の小松引きを詠む先行歌には、「松を引く」ことと「人々が引き連れる」ことを掛けるもの少なからず見え、第二句の発想源となっていることがうかがえる。

つきもせぬ子の日の千代を君がためまづ引きつれむ春の山道（相模・一二）

なお、次の一首は、臨時客を題とし、上句に使用されている語彙から、当該歌の影響が察せられる。（和歌本文は国歌大観CD-ROMに拠るが、第二句は「まづ引きつれて」と表記し、「まづ」と「松」の掛詞と解すべきか）。

臨時客

もろ人の松引きつれてくる宿に春の心はやるにそざりける

（二条太皇太后宮大式・二）

【右歌補説】

「空の鏡」という表現自体は本歌合以前には確認できないが、語釈に記したとおり、美しい月を鏡に見立てる表現は常套的である。よって、これを難とした判詞には無理が感じられる。当該歌以降も「空の鏡」の例は多くは認められないが、以下の一首が挙げられ、当該歌の影響がうかがえる。

秋風は雲の塵をや払ふらむ空の鏡の夜半の月影

（三十六人大歌合・八八）

【二番】

二番 左持 春日祭 範永朝臣
今日まつる三笠の山の神ませばあめの下には君ぞ栄えむ

右 七夕 土左

よろづ世に君ぞ見るべき七夕の行きあひの空を雲の上にて
【左歌他出】 後拾遺・雑六神祇・一一七八、範永・一八、題林愚・九七四一、五代枕・九七

【右歌他出】 栄花・五三九、金葉初・秋・二三三、金葉二・秋・一五八、金葉三・秋・一五一、題林愚・二九八六、高良玉垂宮神秘書紙背和歌・二三八

【左歌語釈】 ○春日祭 旧暦二月に催される藤原氏の氏神・春日大社の例祭。平安初期から行われ、藤原氏の栄華を反映して盛大を極めた。○三笠の山の神 三笠山は奈良市の東部、春日山連山の一つで、麓には春日大社が祀られている。「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」（古今・羈旅・四〇六安部仲麻呂）。○君ぞ栄えむ 春日大社が藤原氏の氏神であることを意識した表現。一番左歌と同様に頼通や寛子を意識し、その繁栄を言祝いだ。

【右歌語釈】 ○よろづ世に君ぞ見るべき この場合の「君」は寛子を指しているよう。寛子が幾久しく見るに違いない、の意。○行きあひの空 七夕の日、牽牛と織女が天の川を行き来して逢うこと。「彦星の行きあひの空を眺めても待つこともなき我ぞ悲しき」（建礼門院右京大夫・二八二）。ここでは、寛子と帝が仲睦まじく年を重ねることへの願いも込められているだろう。○雲の上にて二星が行き逢う上空に、宮中の意を響かせる。

【通釈】 二番 左持 春日祭 範永朝臣
今日お祀りする三笠の山の神がいっしょにしゃれば、地上ではあなたさまが繁栄なさるでしょう。

右 七夕 土左

幾久しくあなたさまは見ることでしょう。七夕の二星が行き来して逢う空を、宮中で。

【左歌補説】

「春日祭」が歌合の歌題となった例は、本歌合以前にはほとんど確認できない。『範永集新注』には、本歌合の六年前、永承五（一〇五〇）年二月に行われた六条斎院歌合における以下の一首が初出だろうと指摘されている。

春日祭 左 武蔵

三笠山指してぞ頼む今日まつる春日の神をあめの下には

（永承五年二月六条斎院合・七）

六条斎院（祿子内親王）の母である藤原娘子は頼通の養女である。その歌題が、本歌合にも引き継がれたという流れが察せられる。当該歌は、ここに挙げた武蔵の歌と「三笠」「今日まつる」「神」「あめの下」の語を同じくし、直接的な影響を看取できる。

【右歌補説】

当該歌のように、「雲の上」に上空と宮中の意を掛け、七夕を詠む例は少ない。ここでは、歌合の主催者である寛子が意識され、末永く宮中で七夕の日を迎えるであろうことを予祝している。また、語釈にも記したとおり、牽牛と織女が年を経ても変わらずに逢瀬を重ねる様子を、寛子と帝の仲になぞらえてもよいよう。

【三番】

三番 左勝 桜花 内大臣
春雨に濡れて訪ねむ山桜雲のかへしの嵐もぞ吹く

右 駒迎 下野

ひく駒の数よりほかに見えつるは関の清水のかげにぎりける水のかげに見ゆとあるところを心得ずとて

【左歌他出】

金葉初・春・八三、金葉二・春・五五、金葉三・春・五四、入道右・七八、袋草紙・五五、袋草紙・三九六、古来風体・四九四、栄花・五四〇、和漢兼・二七七、題林愚・八七七

【右歌他出】

金葉初・秋・二六六、金葉二・秋・一八三、金葉三・秋・一七五、下野・七六、袋草紙・五六、袋草紙・三九七、栄花・五四一

【左歌語釈】

○内大臣 藤原頼宗。藤原道長の次男。藤原公任に次ぐ歌人と称された。○春雨に濡れて訪ねむ 春雨に濡れてでも山桜を見に行こう、の意。『栄花物語』では「濡れて帰らん」と異同があるが、歌意によれば「訪ねむ」が穏当だろう。○雲のかへしの嵐 雨上がりに、雨雲を吹き返すかのように吹く激しい風。

【右歌語釈】

○駒迎 平安時代以降、駒牽（諸国から貢進された馬を天皇が見る儀式）の際、馬を馬寮の使いが近江の逢坂の関まで迎えに出たこと。毎年八月中旬に行なわれた。○数よりほかに見えつる「ほか」は「それ以外」の意。実際の頭数より多く、馬の姿が見えたということ。○関の清水 逢坂の関付近に湧き出ている清水。「音にのみ聞きて渡らぬ逢坂の関の清水に流れぬるかな」（忠見・一八八）。○かげ 水に映った馬の姿。

【通釈】

三番 左勝 桜花 内大臣
春雨に濡れながら山桜を訪ねよう。雲を吹き返す嵐が吹くと、花が散ってしまうから。

右 駒迎 下野

引く駒の数の他に見えた馬は、逢坂の関の清水に映った影なのだった。

「水の影に見る」というところがよろしくない」と言つて（左の勝ちとなった）。

【左歌補説】

当該歌の特徴である「雲のかへしの嵐」という表現は、おそらく、同時代に詠まればはじめた歌語「かへしの嵐」をアレンジしたものと思われる。『王朝歌合集』では、次の伊勢大輔の歌を受けて、頼宗が「かへしの嵐」を詠んだ可能性が指摘されている。

落ち積もるこの山里の木の葉をばかへしの風の吹きかへさなむ

（伊勢大輔・九〇）

雨後の強風としての「かへしの嵐」を詠む例は、先行歌には見出しがたく、当該歌はその早い例と見える。この表現は、後代歌にも影響を与えたことが看取される。

雨のうちの紅葉

ははそはら散りもこそすれ雨雲のかへしの風はふかずもあらなん

（有房・二二三）

雨後落花といふことをよめる

安心法師

山桜雲のかへしの風ふけば雨は雪にぞ降りかはりける

（月詣・二二〇）

【右歌補説】

駒迎は、八月の行事として平安前期以降よく詠まれている。特に、紀貫之による次の歌は、後代への影響が大きく、当該歌もその例のひとつに数えられよう。

八月駒迎

逢坂の関の清水に影見えて今や引くらん望月の駒

（貫之・一四／拾遺集・秋・一七〇）

この番の判詞は、「水の影に見ゆ」という表現を難点とするが、ここで清水の影を引き合い出す理由は、ひとえに貫之の歌の影響に他ならない。判者はそれを承知しつつも、表現に有効性が感じられないと判断したのでだろう。

なお、当歌合と開催年次が近いと考えられる六条斎院歌合に「駒迎」題が見えることも注目される。

【四番】

四番 左 鶯 春宮大夫

山里の垣根に春やしるからむ霞まぬ先に鶯のなく

霞まぬさきに心得ず、まづ霞みてた□などありて

右勝 鹿鳴草 美作

折りやせん折らでや見まし秋萩をつゆも心にかけぬ日ぞなき

【左歌他出】千載・春上・六、袋草紙・三九八、古来風体抄・

五七〇、栄花・五四二

【右歌他出】童蒙・九〇四、袋草紙・三九九、栄花・五四三

【左歌語釈】○春宮大夫 当時の春宮大夫は藤原能信。しかし、

これは皇后宮大夫源隆国の誤りと考えられる。○春やしるからむ「しるし（著し）」は際立っている、の意。はつきりと春を感じられるだろうということ。「つつめども春の気色のしるければ霞の色も見ゆるなりけり」（大斎院・四）。○霞まぬさきに心得ず 和

歌的概念によれば、霞と鶯はいち早く春の到来を感じさせるもの。よって、「霞に先立って鳴く鶯」という表現は、好ましくないとい

うこと。「春霞けしき立ちにしあしたよりまた鶯の初音なりせば」
 (和泉続・五六九)。○まづ霞みてた□ 欠損部分は「霞みて立つ」
 などだろうか。

【右歌語釈】○鹿鳴草 萩の別名。○美作 他出はすべて作者を
 美濃としており、美作は誤りと考えられる。○秋萩を 底本には
 「を」の右に「に」の傍記がある。しかし、後の「つゆも心に」
 への繋がりから「を」が穏当と判断した。○つゆも「露」と「つ
 ゆ(副詞。「少しも」ない)」の掛詞。「雨降れどつゆも漏らじを
 笠取の山はいかでか紅葉染めけむ」(古今・秋下・二六一 元方)。
 ○心にかけぬ日ぞなき 「心をかける」に「露がかかる」の意を
 掛ける。秋萩が咲くと、常にその美しさに心をとらわれていると
 いうこと。

【通釈】四番 左 鶯 春宮大夫

山里の垣根には春がはつきり感じられるだろう。霞に先立つ
 て鶯が鳴いている。

「霞まぬさきに」とは好ましくない。まず霞が立つもの」
 などとあって、(右勝ちとなった)。

右勝 鹿鳴草 美作

折ってしまおうか、折らずに見ようか。そんな風に考えては、
 秋萩を少しも気に掛けない日はないことだ。

【左歌補説】

平安期、春の山里と、霞、鶯を詠み合わせた早い例としては、
 山里は春の霞にとぢられて住処まどへる鶯ぞなく

が挙げられる。以降、

(興風・二二)

閑中鶯

鶯の声ぞ霞にもれてくる人目としき春の山里

(山家・二五)

たとふべき物こそなけれ山里の霞の内の鶯の声

(久安百首・四〇八)

など、鶯は霞に包まれた山里にいる、という詠みぶりが大勢を占
 める。よって判詞が「霞まぬさきに心得ず」と不審がるのも道理
 と思われる。

【右歌補説】

「つゆ」に「露」と「少しも」の意を掛ける例は、平安前期か
 ら数多く見受けられる。また、この掛詞に、縁語「かく」を詠み
 合わせる歌も少なくない。

もろともにおきぬし秋のつゆばかりかからん物と思ひかけきや

(後撰・哀傷・一四〇八)

さらに、「たすき」や「玉簾」などを詠む際に、結句を「かけぬ
 日はなし」とする和歌も、先行歌に見受けられる。

ちはやぶる賀茂の社の木綿襷ひと日も君をかけぬ日はなし

(古今・恋一・四八七 よみ人しらす)

当該歌は、先行歌に見えるこれらの要素を併せて撰取し、詠ん
 だものと考えられる。なお、同時代の『下野集』に、同様の例が
 確認できる。下句がほぼ一致していることから、当該歌との直接
 的な影響関係が想像される。

いとをかしきに、手もをかしげにぞ書きたまへる、御返し
 松虫とさくにつけても宮城野につゆも心をかけぬ日ぞなき

(下野・六一)

【五番】

五番 左勝 子日 顕房朝臣

いづれをかわきて引かまし春の野になべて千年の松の緑を

右 雁 伊勢大輔

小夜ふけて旅の空にてなく雁はおのが羽風や夜寒なるらむ

まことに身にしむ歌也、内殿をかしがらせ給ふ、されど
左、夜二つと申す

【左歌他出】 袋草紙・四〇〇、栄花・五四四

【右歌他出】 後拾遺・秋上・二七六、難後拾遺・四六、新撰朗詠・

三〇五、袋草紙・三〇八、袋草紙・四〇一、袋草紙・五九四、八雲御抄・八七、栄花・五四五、御裳集・三六九、伊勢大輔（伝良経筆本）・三二二、伊勢大輔（群書類聚本）・七三、定家八代抄・三七七

【左歌語釈】 ○いづれをかわきて引かまし どの松を引こうか逡巡する心境。「いづれをかわきて」と詠み出す例は、先行歌に多数見受けられる。「いづれをかわきてしのばん秋の野にうつろはんとて色かはる草」（後撰・秋下・三七一 よみ人しらず）。○なべて おしなべて、総じて。春野の松は、どれもみな長久であるということ。○千年の松の緑 松が幾久しく常緑であることを寿ぐ表現。「君が代の千年の松の深緑さわがぬ水に影は見えつつ」（長能・七五）。

【右歌語釈】 ○小夜ふけて 底本には、「さよふけて」の「けて」に、「かく」の傍記がある。○羽風 鳥が羽を動かすことによっておきる風。「雁がねの羽風を寒み機織女くだまく声のきりきりと鳴く」（古今六帖・四〇一七「機織女」よみ人しらず）。○夜寒 秋

（八）

が深まり、夜の寒さを感じることに。「我が背子が我に枯れにしまへより夜寒なる身のあきぞ悲しき」（好忠・二二二）。○まことに身にしむ歌なり 判詞。右の歌が実にしみじみとした良い歌だという評価。○内殿 「うちのおおいどの（内大殿）」の誤脱か。『王朝歌合集』では宇治殿とし、藤原頼通と解している。同注釈に記されるとおり、内殿で内大臣を表す例は確認できない。しかし、頼通の反応が突如言及されるのも不自然に思われる。文脈から、判者・頼宗を指すと解釈したい。○左、夜二つと申す 左の人々から、「夜が二つ入っている」と歌病を指摘された。

【通釈】 五番 左勝 子日 顕房朝臣

いったいどの松を選んで引けばよいだろうか。春の野で、なべてみな千年の齢をもつ常緑の松を。

右 雁 伊勢大輔

夜が更けて旅の空で鳴いている雁は自分たちの羽風で夜の寒さがことさら身にしみるからなのだろうか。

本当に、しみじみと身にしみる歌である。内大臣もお褒めになっている。しかし、左の人々が「夜が二つある」と申す（ので、左の勝ちとなった）。

【左歌補説】

語釈に『後撰集』の例を挙げて記したとおり、「いづれをかわきて」と詠み出す歌は、先行歌に多く見受けられる。

いづれをかわきて折らまし山桜心移らぬ枝しなければ

（後拾遺・春上・八九 輔親）

顕房の歌は、輔親の歌などを参考とし、それを子の日の小松引きに応用して詠んだものと考えられる。

【右歌補説】

旅の空にある雁の辛さに、秋の夜更けの寒さを添えた情趣豊かな一首。しかし、「夜」を二度使用している点を左方から指摘され、負けとなった。『伊勢大輔集』では「秋ごと」に（伝良経筆本）、「衣薄み」（群書類聚本）の形で収載されている。本歌合との相違は、歌病の指摘による改変とみて良いのか、判断し難い（『伊勢大輔注釈』も断言を避けている）。

「おのが羽風」を詠む先行歌としては、

鶯の鳴くをよめる

素性

こづたへばおのが羽風に散る花を誰におほせてこころ鳴くらむ

（古今・春下・一〇九）

がある。「鳴く」と「泣く」を掛ける点も含め、当該歌への影響が察せられる。また、「鳥の羽風が寒さをつのらせる」という趣旨の先行歌としては、以下の歌が挙げられる。

飛び通ふをしの羽風の寒ければ池の水ぞさえまさりける

（拾遺・冬・一三三二紀友則）

おそらく伊勢大輔は、これらの先行歌の表現を摂取したと考えられる。なお、歌病の指摘はあったものの、当該歌は『後拾遺集』に収載された。後代、この歌に影響を受けたと思しき歌も確認できる。

同夜当座御会に、月前雁

雁がねも雲の衣を厭ひけりおのが羽風に澄める夜の月

（秋篠月清・一二二四）

夜を寒み心づからや鳴く千鳥おのが羽風にむすぶ水を

（久安百首・五五）

【六番】

左持 梅 相模

岩間漏る水にぞやどす梅の花梢は風のうしろめたさに

梢ながらあらせまほし、散らせたりとあり

右 鹿 民部卿

高砂の尾上の鹿をゆく船のうら悲しくや過ぎがてに聞く

鹿をゆくほど心得ず、又末はいまいましとてよみ笑ひこめられぬ

【左歌他出】 袋草紙・四〇二、栄花・五四六

【右歌他出】 夫木・四六七三、経信・一三三三、袋草紙・四〇三、万葉集時代難事・六九

【左歌語釈】

○岩間漏る 岩間をすり抜ける。○水にぞやどす 水に映り込んでいることをいう場合が多いが、当該歌では、水に花びらが浮かんでいる様子を指すと思われる。詳しくは補説。○風のうしろめたさ 風で散ってしまうのではと心配であること。○「朝まだきおきてぞ見つる梅の花夜のまの風のうしろめたさに」（拾遺・春・二九 元良親王）。

【右歌語釈】

○民部卿 藤原長家。しかし当該歌は『経信集』にも収載されている。新編日本古典文学全集『栄花物語』頭注では、「経信の代作か」と指摘している。後の九番右歌も同じ。○高砂の 尾上を引き出す枕詞。「夕暮れは風の声も高砂の尾上の松につけてこそ聞け」（能宣・一九六）。○尾上の鹿を 下句に「聞く」とあることから、鹿の鳴き声を指すと考えられる。○ゆく船の 底本では「こぐ船の」。右に「ゆくふねの」と傍記がある。判詞との整合性から、「ゆく船の」が穏当と判断した。○うら悲しくや

「うら」は、「何となしに」の意に「浦」を掛ける。「磯におふるみるめにつけて塩竈のうら寂しくもおもほゆるかな」（為頼・四五）。○過ぎがてに聞く 底本では「すぎがてになく」とあり、「な」の右に「き」の傍記がある。「聞く」でなければ歌意が通らないため、これを穩当と見た。

【通釈】 六番 左持 梅 相模

梅の花は、岩間を漏れ出て流れる水にこそ、花を留まらせる。梢の花は風で散らされるのが気がかりなので。

梢に咲いているままであつてほしい。散らせてしまった、とあり。

右 鹿 民部卿

尾上の鹿の鳴き声を、浦をゆく舟はもの悲しく感じ、素通りできずに聞いているのだろうか。

「鹿に行く」というところが理解できない。また、最後が氣にくわないといつて読み、笑いを押し込めていらっしやる。

【左歌補説】

「水にやどる」という表現は、先行歌では、

久方の天つ空なる月なれどいづれの水に影やどるらん

（拾遺・雑上・四四〇 躬恒）

など、月が水に映り込んでいる様子を詠む場合が非常に多い。しかし、次の同時代詠を踏まえると、当該歌では「水に花びらが散り浮かんでいること」を表現したと考えられる。

桜の盛りに、上の御局におはしまいらしに、御前の泉に、散りたる花をいと多く入れさせたまへるを

行く末もはるかにや見む桜花岩間をいづる水にやどして

（下野・一八三三）

この『下野集』の歌と当該歌との前後関係は判然としないが、内容から影響関係にあると考えられよう。

【右歌補説】

判詞は、これを三句切れで解釈している。だが本来は、二句切れで「尾上の鹿の声を聞き、素通りしがたい様子だ」と解すべきだろう。眼前の光景に心ひかれ、「過ぎがて」と詠む歌は、平安前期から多数見受けられる。

過ぎがてに野辺は経ぬべし花すすきこれかれ招く袖の見ゆれば

（古今六帖・三六九九）

しかし、鹿の鳴き声の悲痛さゆえに「過ぎがて」であると詠むのは、当該歌の工夫と思われる。ただし、以下の古今六帖歌と下句が非常に近く、参考とした可能性がある。

和歌の浦に若芽刈り干す我を見て沖漕ぐ舟の過ぎがてにする

（古今六帖・一八七六「うら」）

【七番】

七番 左持 若菜

摘みに来る人は誰ともなかりけり我がしめし野の若菜なれども

右 山田 大輔

秋の夜は山田の庵に稲妻の光のみこそもりあかしけれ

此歌はすぐれたり、ひとしきかなかなりや

【左歌他出】

後拾遺・春上・三二六

【右歌他出】

後拾遺・秋下・三六八、続後撰・賀・一三七三、伊

勢大輔・三二、栄花・五四三、御裳集・四五七、伊勢大輔（彰考館本）・七四

【左歌語釈】○誰ともなかりけり 誰それと限定できないくらい大勢いるということ。○しめし野の 標を結って占有している野。「人しれず我がしめし野の常夏は花咲きぬべき時ぞきにける」（後撰・夏・一九八よみ人しらず）。

【右歌語釈】○稲妻 稲光。雷光。稲が実る時期は雷の多い季節でもあることに由来する。「あしひきの山田を植ゑて稲妻のともに秋にはあはんとぞ思ふ」（貫之・五一〇）。○もりあかしけれ 「もり」は「守」（田を守る）と「漏」（稲妻が漏れ入ってくる）の掛詞。「とは山田種まきおける人よりも井関の水はもりまさるらん」（順・二二四）。

【通釈】 七番 左持 若菜

摘みに来る人は、誰それと限ることもなく大勢いることだ。私が標を結った野の若菜だけれども。

右 山田 大輔

秋の夜は山田の庵に、稲妻の光ばかりが漏れ入り、田を守り明かすことだ。

この歌は優れている。どちらも同じくらい良く、優劣をつけられない。

【左歌補説】

若菜を摘もうと、野に標を結うという表現は、『万葉集』以降よく見られる。

明日よりは 春菜摘まむと しめし野に 昨日も今日も 雪は降りつつ
（万葉集・巻八・二四二七 山部赤人）

また、「我がしめし野」を詠う歌も少なからず確認でき、これらの中には、「なでしこ」や「女郎花」を詠み込み、男性が恋人に向けて不実を恨むような内容のものが目立つ。

女郎花

うしろめた我がしめし野の女郎花花見る人に心うつるな

（和泉・一四五）

【右歌補説】

稲妻とともに秋の田を詠む歌は、平安前期から多く見受けられる。

足曳の山田を植ゑて稲妻のともに秋にはあはんとぞ思ふ

（貫之・五一〇）

また、「山田」と「もる（守、漏の掛詞）」を詠み合わせる歌も少なくない。

秋の田の庵といふことを、是貞親王の家の歌合に

山田もる秋のかりほにおく露はいなおほせどりの涙なりけり

（忠岑・二八）

ただし、先行歌の例は、水や露が漏るとするのに対して、当歌は稲妻の光が漏れ入るとする点に新味がある。そしてこれ以降、同様の掛詞が散見され、当歌の影響が見て取れる。

里遠み山田の庵は稲妻の光のものを友と見るかな

（永久百首・二七九 常陸）

山田もる宵の稲妻影消えてかたしく袖に月ぞやどれる

（範宗・二五七）

八番

左持 柳 内侍

皆人の心にかけてくるものは岸に浪よる青柳の糸

古き歌とてその歌とりいでられたり

右 紅葉 民部卿

大井川たぎつ瀬もなく秋深み紅葉の淵となりにけるかな

紅葉といふところあるやうにあり、とあり

【左歌他出】 栄花・五四八

【右歌他出】 続後拾遺・秋下・四〇四、経信・一三五、栄花・五四九、歌枕名・五九九

【左歌語釈】 ○心にかけてくるものは 気にかける。心引かれる。「柳」「糸」「かく」「くる」「よる」は縁語。「かく」は「心に掛ける」と「糸を撚り掛ける」の、「くる」は「来る」と「繰る」の掛詞。○浪よる「よる」は「波が寄る」と「糸を撚る」の掛詞。○古きうたとて このような表現は古歌にあったといつて、その歌を挙げた。古歌に倣い、工夫が乏しいことを難とする。

【右歌語釈】 ○大井川 京都市西京区嵐山を流れる川。平安時代以降、桜、紅葉の名所。「落ちつもある紅葉をみれば大井河井堰にとまる秋にぞありける」（公任・一四〇）。○秋深み「深み」は、川水が淀んで深淵を形成することと、秋が深まることを表現する。○紅葉の淵 直前の「深み」を受け、「紅葉が多くとどまり、色濃い淵となった」と表現したもの。○紅葉といふところあるやうにあり この詠みぶりでは、紅葉という地名があるように感じられてしまうということ。

【通釈】 八番 左持 柳 内侍

(一一)

人がみな心引かれて見に来るものは、岸に寄る波に縋りあわされた青柳の糸である。

古歌にあるといつて、その歌を取り出された。

右 紅葉 民部卿

大井川には流れの激しい瀬もなく深淵が形成され、秋が深まると（散り積もった紅葉がとどまって）色濃い紅葉の淵となったことだ。

紅葉という地名があるような表現だ、とある。

【左歌補説】

縁語を多用して構成された歌である。非常に常套的な詠みぶりだが、当該歌のように「かく」「くる」「よる」を全て盛り込む例はあまり見受けられない。工夫が乏しい上に、詰め込みすぎた印象がある。

青柳の糸よりかくる春しもぞ乱れて花のほころびにける

（古今・春上・二六貫之）

鶯の糸によるてふ玉柳ふきな乱りそ春の山風

（後撰・春下・一三一 よみ人しらず）

【右歌補説】

川の淵と瀬の深さ、浅さを、「散り浮かぶ紅葉の濃淡」と結びつけて詠む歌は、古今集時代以降多く見られる。

水の面の深く浅くも見ゆるかな紅葉の色ぞ淵瀬なりける

（躬恒・一〇一）

亭子院の御屏風に、庭のほとりに紅葉あり

浮き沈み淵瀬流るる紅葉ばに深く浅くぞ色は見えける

（伊勢・一四六）

当該歌は、こうした和歌表現を受けて詠まれたと考えられる。

九番

左勝 春雪 範永妻

花ならで折らまほしきは難波江の葦の若葉に降れる白雪

右 菊 民部卿

紫の深からざりし秋だにも菊は心にしめてしものを

初秋にうつろふやとあり、紅葉梯にと言はまほし

【左歌他出】後拾遺・春上・四九、範永・一七、古来風・四〇四、

栄花・五五〇、題林愚・四二六、五代歌枕・九六五、歌枕名寄・

三五五三

【右歌他出】経信・一三四

【左歌語釈】○範永妻 底本には作者名の下に「範永哥か」と注

記がある。○難波江 大阪市の上町台地の西側まで来ていた海域

の古称。難波渚。葦が繁茂している場所として、『万葉集』以降、

さかんに和歌に詠まれた。「津の国の難波の葦の目もはるにしげ

き我が恋人知るらめや」（古今・恋二六〇四貫之。○白雪 底

本では「しら」の右に「アハ」の傍記がある。しかし、「淡雪」よ

りも「白雪」の方が花の見立てとして穏当と判断した。

【右歌語釈】○紫の 菊が移ろい、紫色に変色することを指す。「紫

の千種の色し深ければ行く末遠く見ゆる白菊」（元輔・一五七）。

○深からざりし秋だにも 「色が浅い時期でも心惹かれるのだから、

色が深まった折は尚更だろう」の意。「深からざりし」は「紫」

と「秋」にかかり、それぞれ「紫色が深くない」「秋が深まって

いない」の意となる。○心にしめてしものを 上句の「紫」を

け、染色に準えて、「菊の美しさが心に染みる」と詠ったもの。「唐人の衣染むてふ紫の心にしみて思ほゆるかも」（古今六帖・三五〇三・紫）。○初秋にうつろふや 「初秋（深からざりし秋）に菊は変色しない」の意。○紅葉梯に 底本に「もみぢはしに」とあるが、解し難い。補説に詳述する。

【通釈】左勝 春雪 範永妻

花ではないのに手折りたいと思うものは、難波江の葦の若葉に降った白雪である。

右 菊 民部卿

まだ紫色が深まっていない秋でさえ、菊は心にしみじみと美しく感じられることだ（色濃くなった頃はなおさら美しいだろう）。

「初秋に菊が変色しようか」とある。「紅葉が階梯にある」と言ってほしいところだ。

【左歌補説】

底本は、作者を範永妻と記しているが、『栄花物語』は但馬、『後拾遺集』は範永としている。『範永集新注』は、当該歌は範永の代作で寛子女房・但馬は範永妻かと推測している。

葦に積もった雪を、花に見立てて「手折りたい」と詠う。雪を花に見立てるのは、平安前期以降の常套だが、葦に積もる雪を花に見立てて詠む歌は先行歌には見出しがたい。

当該歌とほぼ同時期に詠まれた次の歌は「葦」「若葉」「雪」を詠み合わせる点から、影響関係が想定される。

三島江

うらなる葦の若葉にとひ見ばやかかる御雪はいつかみしまえ

（伊勢大輔・七九）

当該歌以降は、難波江の雪を詠む歌、さらに葦に降り積もった雪を花に見立てる歌も散見されるようになる。

心あてに眺め行くかな難波湯雪の花咲く葦の枯れ葉を

（拾玉・七六二）

【右歌補説】

「紫」「心に染む」という表現の早い例として、以下の『万葉集』の歌が挙げられる。

からひとの 衣染むといふ 紫の 心にしみて 思ほゆるかも

（万葉・巻第四・五七二 大典麻田連陽春）

また、菊が紫色に変色することを賛美する歌は、平安前期以降多く確認できる。

寛平御時后宮の歌合の歌 大江千里

植ゑし時花まちどほにありし菊うつろふ秋にあはむとや見し

（古今・秋下・二七二）

しかし、判詞は「初秋に菊は紫色にならないだろう」と指摘し、「もみちはしにといはまほし（底本ママ）」とする。おそらく、初句を変更する必要があるとして代案を示したものと思われるが、どのような変更を促したのか、解し難い。ひとまず、「紅葉梯に」として試したが、何らかの誤脱があろうか。

【十番】

左勝 祝 御製

長浜の真砂の数も何ならずつきせず見ゆる君が御代かな

右の祝詠みだにいださせて、左の人々勝ちぬとて立ちぬ

（一四）

るに、内の大^{うしろ}殿祝の数はい□^欠まされるとのたまへるに

右 同 大輔

住の江に生ひそふ松の枝ごとに君が千歳の数ぞこもれる

とあるに、千歳はとある数知らぬかたなし、便なくとの

給ふ

【左歌他出】金葉初・賀・四六九、金葉二・賀・三三一、金葉三・

賀・三三五、詞花・雑下・四一七、栄花・五五二、歌枕名・四八四二

【右歌他出】新古今・賀・七二五、伊勢大輔（彰考館本）・七五、

栄花・五五三、歌枕名・三八八〇

【左歌語釈】○長浜 歌枕。所在は不明。「長浜にゐてしほたるほととぎす五月ばかりはあまにざりける」（躬恒・一六六）。○何ならず 「とるに足らない。問題ではない」の意。

【右歌語釈】○生ひそふ 「ますます生い茂る」の意。竹や松が高々と成長する様子を詠む場合が多い。「年ごとに生ひそふ竹のよよをへてたえせぬ色を誰とかはみん」（貫之・一九八）。○千歳の数ぞこもれる 「常緑の松の一枝一枝に、千年も続く御代がこもっている」と寿ぐ。「ひきて見る子の日の松はほどなきをいかでこもれる千代にかあるらん（拾遺・雑春・一〇二三 惠慶）。○千歳はとある数しらぬかたなし 左歌が「つきせず（数限りない）」と詠むのに対し、「千歳」は数に限りがあるので、左の祝意がまさっていると判断された。

【通釈】 左勝 祝 御製

長浜の真砂の数も問題にならない。尽きることがないと見える君の御代であるよ。

右歌を披講さえず、左の人々が「勝った」といつて立ち上がったところ、内大臣が「祝の数はどちらがまさっているだろうか」と仰るので、

右 同 伊勢大輔

住の江に高く生い茂る松の一枝ごとに、あなた様の千年も続く御代の数がこもっています。

とあるのを、「千歳は」とある数を知らない者はいない。これでは具合が悪い」と仰る。

【左歌補説】

浜の砂の数に、永久に続く御代を託して詠む歌としては次の一首が著名であり、当該歌はこうした例を踏まえ、「真砂の数すら何程でもない」と詠んだ。

わたつ海の浜のまさごを数へつつ君が千歳のありかずにせむ

(古今・賀・三四四よみ人しらず)

【右歌補説】

松に事寄せて長久を詠む歌は枚挙にいとまがないが、「松の一枝ごとに千歳がこもる」と表現した点は当該歌の工夫と言える。後代に類似する表現は、数は多くないが確認できる。

枝ごとに幾その千代を契るらんその神世よりいきの松原

(永久百・五三二 常陸)

【付記】

本稿は、和歌文学会二〇一八年一二月例会（於立教大学）での口頭発表に基づく。当日席上でご教示を賜った先生方に心より感謝申し上げます。

【注】

*1 道長執政期から頼通執政期に向け、歌合が再興していく様相や、その背景については、三原まきは氏「高陽院行幸和歌」の性格」（久下裕利編『狭衣物語の新研究』所収、新典社、二〇〇三年）、和田律子氏「藤原頼通の文化世界領導認識——高陽院行幸和歌」から「上東門院彰子菊合」へ」（桜井宏徳・中西智子・福家俊幸編『藤原彰子の文化圏と文学世界』所収、武蔵野書院、二〇一八年）、加藤静子氏「女院藤原彰子の信仰と『栄花物語』」（『日本文学研究ジャーナル』第六号、二〇一八年六月）などに詳しい。

*2 萩谷朴氏『平安朝歌合大成増補新訂版』（同朋社出版、一九九五年）。

*3 本歌合における装束の新奇さについては、拙稿『栄花物語』の「皇后宮春秋歌合」——特に女房装束の描写に注目して——（『日本女子大学文学研究科紀要』第一五号、二〇〇九年三月）に論じた。

*4 注②に同じ。

*5 『四条宮下野集』七八番歌詞書に、「宮の亮師基「御歌三つ入りぬ」と告げこせ給へりしほどに、「女院より『これを』と仰せらるとて、伊勢大輔がに二つは替へられぬ」と、口惜しがり給ひしこそ、その折は憂れはしかりしか。」とある。

Annotation of “Kougougu Kanshi syunju utaawase”

MORITA, Naomi

キーワード：皇后宮春秋歌合、注釈、藤原頼通時代

Key words : Kougougu syunju utaawase, annotation, Yorimichi Fujiwara